国有化闘争の背景

〝働くだけ働かせて閉山とは……〟

古河目尾鉱労組をたずねて

(1)

二月十日、十一日の炭労臨時大会は、大詰をむかえた石炭政策反対・国有化春闘を組合員一人二千円のカンパで闘い抜くことを決定したが、石炭政策答申後はや一カ月九州でも閉山の嵐がふきあれている。編集部では国有化春闘をむかえて、筑豊地方の状況をさぐってみた。

山広労働部長

閉山交付金がならい

この一カ月九州の炭鉱で閉山が決定したのは、日南竹ノ迫（熊本）古河目尾（福岡）飛島（長崎）山住（長崎）新高野鉱（長崎）となっている。このあと、あと十炭鉱ぐらいが近々閉山が準備されており（二月十四日付毎日新聞）石炭政策で決定された「石炭産業のスクラップ」はいよいよ日程にのぼってきた。

これは、新石炭政策で決定された閉山交付金の増額（平均一トンあたり大手三千九百九十円、中小三千六百八十円）の交付をまって一挙に閉山の動きが出はじめたものである。

石炭産業のスクラップという背景をもって、われわれの国有化闘争もいよいよ本格化するが、今回は新政策による第一号の閉山通告に家族ぐるみで闘う目尾労組を訪ねた。

平均年令四十四才、閉山でも行くところがない

目尾労組の山広労働部長によると、目尾鉱と労働者の概況はつぎのとおりである。

現在目尾鉱の労働者は直轄工（組合員）二百六十二名、臨時夫九十名、組夫六十名。組合員の平均年令は四十四・四才で三～四人の家族もち。平均賃金は採炭で千四、五百円、坑外で千円。

組合員は三十八年には約千名いたのが、現在では三分の一以下。ところが三十八年には、一人二十一・九トンだった出炭能率が、昨年には五十トンから五十五トン。

石炭政策の変動の中で、なんとか甘い汁を吸おうとした古河資本の犠牲は、どこでも労働者にかかり、千人当りの負傷率はなんと二・〇（三池のおよそ二倍）という炭鉱の中でも最高クラスである。

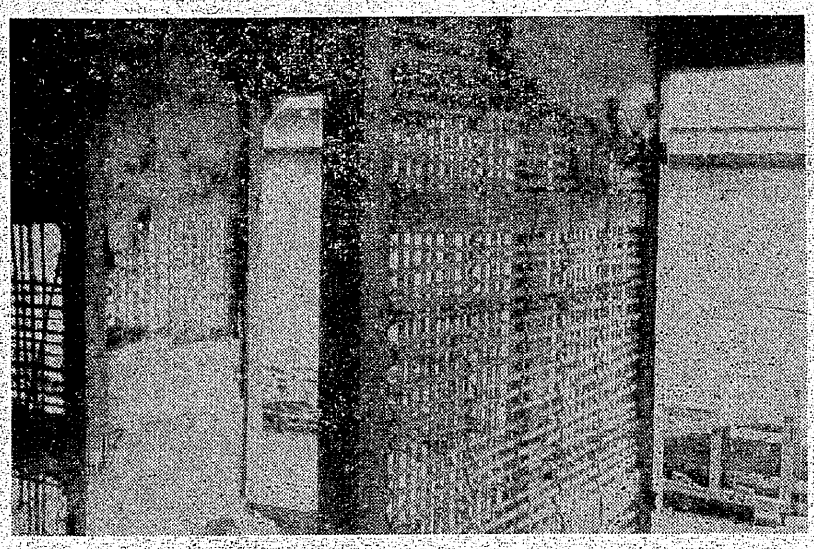
危険は多く、金は安いが年はとって家族も多いし、閉山になっても行くところがないというのが大多数の組合員の声だ。

十年間はつづけるとダマシ討ち

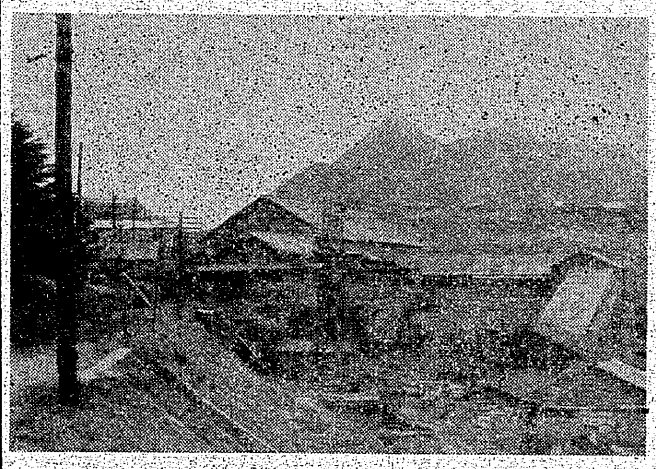
目尾鉱七十年の歴史も労働者の血と汗の歴史だった。とくに昭和三十九年以降の合理化につぐ合理化は、目尾鉱労働者の生命と健康を奪いつづけた。

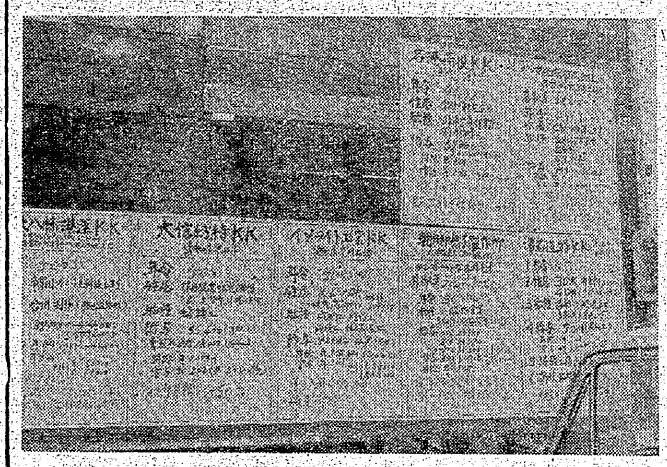
昭和三十九年には活動家をふくめた二十六名に指名解雇、九十名に退職勧告がなされ、組合内部に会社による刷新同盟ができて大ゆれにゆれ、昭和四十二年には「あと十年間は古河直営の経営をつづけるために」という理由で、標準作業量十七パーセントの引き上げ精勤賞与の廃止、退職金計算の打ち切りなどをふくむ第六次合理化が強行された。

そして一年半もたたない今年一月二十二日、突然閉山が通告されたのだった。団交の席上、会社は公然と「第六次合理化は四十二年に政府から十七億円の肩がわり資金をもらうための作文だった」と公言し、今回は増額された閉山交付金をもらうために閉山することをウラ付けたものだった。



筑豊地帯にるいるいとつづく社宅の廃墟。いまや筑豊は「死の床」と化しつつある。





（上）は閉山まじかい目尾鉱（下）はり出された求人ビラ

一に三井、二に古河

会社のやり方はいつも汚い

ここ古河目尾では「資本家でやり方がきたないのは、一に三井で二が古河」といわれている。これは三井資本の極悪非道がいかに万人の認めるものであるかということでもあるが、それにおとらず古河資本の労働者抑圧はすさまじい閉山交付金のために労働者をコキ使ってきたということはさておき二月二十七日に閉山すれば、今後支払うべき失業保険の事業者負担がいくらか軽くなることが計算されている。

また、組合が閉山反対をきめるとともたんに残業を全廃したり、組合業務による公休を認めなくなったりしたことにもみられる。

一人一万円カンパで反対闘争

これに対して組合員の怒りは一挙に爆発した。組合大会では一人五千九百五十円の闘争資金カンパが決定された。炭労のカンパや古炭連のカンパをあわせると一万円にもなる。

それでも炭労の国有化春闘の中で統一闘争を堅持しながら闘えば必ずやカンパの分はとりもどせるという気持だという。

二月十七日から現地では団交がはじまり、炭労の現地対策委員会も設置され、闘いはいよいよ本格化する。

広瀬政司さん

いざとなると離れられない

組合員の一人広瀬政司さん（五十三才）は、つぎのように語っている。

「兵隊から帰って、あと一年だけ、あと一年だけといいながら二十年も仇いてきた。子供が三人とも中学と高校だし、土地ははなれられないし、仕事といっても五十三ではどうしようもない。いざとなるとどうしようもない。いままでの労働に見合うことだけは必ずしてもらわなければ……」

CO闘争の中から

第十五回

鉄格子の中で

気狂い扱いされる主人

CO患者家族　隈みちよさん（51才）の話

「もう籍がない」という会社

隈政市さん（五十五才）はCO中毒症患者の中でも数少ない労災保健の長期傷病給付患者として現在治療中である。大牟田市にある三池保養院という精神病院に入れられている。

いまは片方の耳がまったくきこえず、耳なりがやまず、はげしい目まいに襲われる。他の患者のようにカッとなって暴力をふるうことはないが、CO患者特有のモノ忘れははげしい。

こんな政市さんに会社は「もう停年すぎて会社に籍はないのだから」とまるでじゃま者あつかいだった。

わずか一ケ月半で強制退院

昭和三十八年十一月九日、天領病院にかつぎこまれたという知らせで、みちよさんが病院にかけつけたときは、もう手術がはじまったあとで手術室の前に立ちつくして待つ以外になかった。

廊下をいそがしげに行き交う付き添いさんや看護婦さんが「隈さんが一番ひどかげな、今夜一晩もつかどうかわからん」と話し合っていた。

政市さんのケガと手術のあとの治りは早く、一ケ月半たった十二月二十九日には「もう外科としてはすることがないから」という理由で、精神々経系のさまざまな障害は残したまま、まるで追いたてるように退院させられてしまった。

まるで気狂あつかい

昭和四十一年に組合側の民医退の先生から「早く入院させないと手おくれになる」といわれ、組合から強く交渉してもらい三池保養院（精神科）に入院させてもらった。

CO中毒症はこんなに恐ろしいものかと思うくらいいろんな症状がでてくる。昨年は二回も、十本の手の指が一本ずつ順に真赤にはれていくという症状がでた。はれると、激痛を感じ、痛いというと「そんなに痛いなら泣くといいたい」と病院からいわれた。

何をいっても「神経質、気ちがいで片付けられる」と政市さんはくやしがる。

差別されつづけ、そしてこんなにされた……

被災前の政市さんは坑内運搬工として、いくつも資格をもった優秀な労働者だった。家でもやさしいお父さんで、自分が困っても人を助けるという性質だった。

三池闘争後、そういう政市さんに会社は連日のごとく第二組合に脱落することを説得したが「おれはおれの信念でいく」といって、労働者の道をあるきつづけた。

みちよさんも「三池労組におって賃金がへってもよかたい。金は天下のまわりものやけん。正しい道をあるいた方が気持ぐらいよかろうが。がんばらなんたい」といって政市さんをはげましたものだった。

会社の差別もはげしく、政市さんが説得をハネ返した翌々日からちょうど一年間、坑外の堤防埋めたてに差別配役されていじめ抜かれた。そして、また坑内にもどされてすぐ爆発にあった。

元気で停年になったのならいいが、いまのままで「これで会社に籍はありません」といわれても引きさがれない。とみちよさんは決意を固めている。

写真は初孫を抱く政市さん。「これが歩くまでオレがおるじやろうか」と政市さんはつぶやいた。